会津大学短期大学部研究年報第51号 pp. 111～125 (1994)

ワーズワスの地誌詩と想像力
―「ダドン川ソネット集」を中心にして

近　藤　　哲

はじめに

作家が作品を創作する場合、一般的に言えば、作家はまず作品の展開する基盤となる地理的空間を準備しなければならない。その空間は現実の空間とは全く無縁の、いわば作家が想像裡に作り出した架空の空間である場合もあれば、現実の具体的地理と対応していると見なされうるような空間である場合もある。

後者の例として、トマス・ハーディの作品群を取り上げることが可能だろう。彼の小説のほとんどは、南イングランドの彼の故郷、ドーセット州を舞台にしていることは周知のことである。代表作『テス』がドーセットの地理的細部を克明に描き込み、例えば、第1章で語られるダービーフィールドの先祖が眠るキングズビア・サブ・グリーンヒルの納骨堂は、ドーチェスターの東およそ…マイルのところにある…のことである、といった具合に、作品中の場所に対する現実の具体的対応地点はよく指摘されているところである。あるいは、ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』が、1904年6月16日のダブリンを再現しようとした極めて意図的な地誌小説であることもよく知られているところである。

詩人ワーズワスの詩の多くも、イングランド北西部に広がる風光明媚な故郷の湖水地方（the Lake District）を歌い込んだ地誌詩（topographical poems）である。80年の生涯のほとんどをその地で過ごし、美しい大自然との交流から生まれた彼の詩には、その地の地誌的言及がふんだんにほどこされている。

筆者は今年の夏(1993年7～8月)、「ワーズワス学会」(Wordsworth Conference in Grasmere 1993)に参加する機会を得た。毎日午後に設定されたエクスカージョンでは、ワーズワスの詩の舞台となった少々険しい山々やなだらかな高原、太古以来と想像される巨木の繁る森、平たい切石を積み上げた仕切りの壁が美しい模様を描く緑の牧場、鏡のように静かに水をたゝえた大小の湖沼群などを訪ね、彼の詩の世界により深く感覚的に浸ることができた。

ダドン川探訪もそうした印象深いフィールドワークの一つであった。それは午後4時間程の水源から河口までのダドンの流れを辿るバスの旅であった。徒歩でなかったのは残念であったが、「ダドン川ソネット集」（*The River Duddon, A Series of Sonnets*）（以下「ダドン川」と略）に言及されていると想定される地点ではバスを降り、ゆったりと周囲の地理的状況を観察し、そこに関わるソネットを朗読するという、実に忘れ難い体験を持つことが出来た。

本稿では、この実地探訪を踏まえ、ワーズワスは「ダドン川」で現実のダドンの流れをどう文学化したか、彼が想像力によってダドン川をどのように変容し、特殊な文学空間を構築していったかを、主に水の流れと時間の流れの関係から見ていきたい。

※

ワーズワスが生涯を通して「水の流れ」に強い関心を抱いていたことは、川の様々な様相を視覚と聴覚を駆使して歌うその豊富な詩が自ずと証明するところであろう。彼の詩の外に直接的にそうした興味を表白している場面を妹ドロシーの日記に散見することができる。

小川や川の最も大きな魅力は、それを自由に、流れるまゝに追っていくことにある。私たちはそれを好きな気分の中で－例えば、静かな、騒々しい、せっかちな、あるいは落ち着いた気分でといったふうに－受けとめることができる。小川や川の美は追い求められなければならない。その美を追求することの中に歓喜があるからである。一方、湖や海の美は自ずとむこうからこちらにやって来る。①

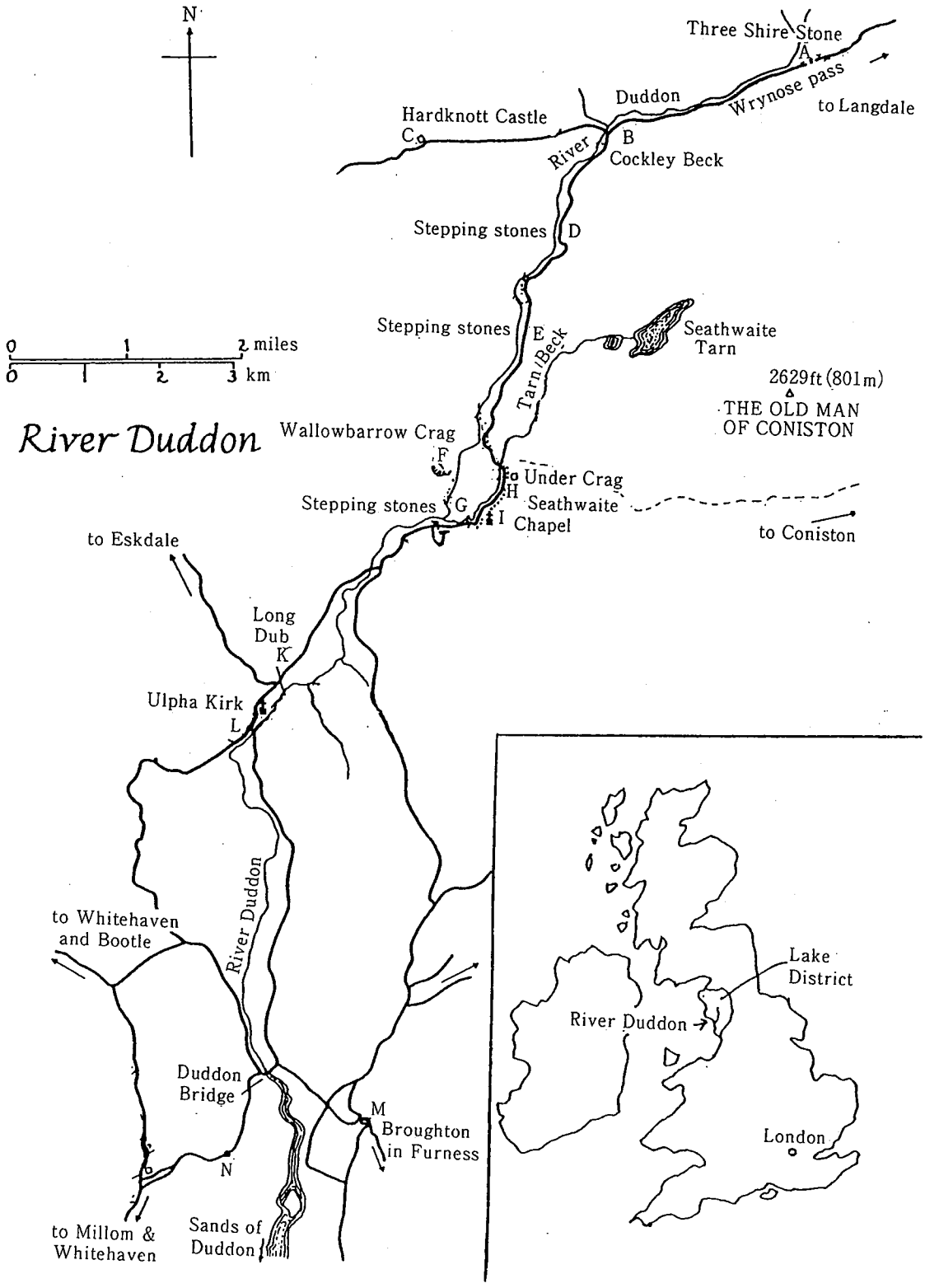
1803年、ワーズワス、コールリッジと3人のスコットランド旅行中、クライド川（Clyde）を目の前にしてのドロシーの感想である。川の美を追求するこうした旅は「日記」のあちこちに見られるところで、例えばオルフォクスデンでは次の様なことが記されている。「4月6日。川の源まで辿るつもりで小さい方のクーム（the lesser Coombe）を少し歩いて登った。しかし夕闇が迫り、寒くなってきたので断念する。」そして翌日の欄には、「夕食前クームの水源まで行った。いくつもの山の頂を越えて帰宅した。」②とある。詩人と妹がレイスダウンからオルフォクスデンに移ったのは1797年の夏である③から、この日記中の4月は当地での最初の春であった。春の息吹を感じ始め、彼らは家の近くを流れる小川の源まで辿ってみたのである。翌日再び挑戦する姿勢に彼らの並々ならぬ強い関心を見ずにはいられない。

あるいは「1837年イタリア周遊旅行の想い出」（*Memorials of a Tour in Italy, 1837*）に付した詩人自身の注には、「イタリアの川の美しさは否応なしに、子供時代から故郷の小川や急流を見てきた者の共感を呼ぶものである」とし、当時67歳の詩人がヴォークルーズ川（Vaucluse）の水が湧き出る河床のある険しいごつごつした岩山を、2、3時間も駆け上がるように登った思い出を懐しそうに書きとめている。④

こうしたワーズワスにとって、故郷の川ダドンは、生家のすぐ裏を流れるダーウエント川と並んで、彼に特別な感慨を抱かしめた。

彼とダドン川の関わりは一生を通して深いものであった。まず彼がホークスヘッド・グラマースクールの生徒であった頃、近所に住む男とダドンの上流に魚釣りに行ったのが初めての出会いであった。しかし獲物はほとんどなく、どしゃぶりの雨に会い、疲労困憊、男に背負われてほうほうの体で家に辿り着いた苦い経験があった。彼はしばらくの間、失望と悲嘆の情なしにはダドン川を思い出せなかったという。その当時は、やがて自分が「愛と賞賛の歌」をダドンに献げるようになるとは思ってもみなかった。⑤

それから2、3年後の大学時代、彼は河口から1マイル程の所にあるBroughton（地図上のM点）⑥の親戚の家を何度か訪ねてはダドンの岸辺を逍遥し、楽しい数時間を過ごしたこともあった。⑦


N
Three Shire Stone
A
Wrynose pass
to Langdale
Duddon
Hardknott Castle
C
B
River
Cockley Beck
Stepping stones
D
Stepping stones
E
Tarn Beck
Seathwaite Tarn
0 1 2 miles
0 1 2 3 km
2629ft (801m)
THE OLD MAN OF CONISTON
River Duddon
Wallowbarrow Crag
F
Under Crag
H
Seathwaite Chapel
Stepping stones
G
I
to Coniston
to Eskdale
Long Dub
K
Ulpha Kirk
L
to Whitehaven and Bootle
River Duddon
Duddon Bridge
M
Broughton in Furness
N
to Millom & Whitehaven
Sands of Duddon
Lake District
River Duddon
London

「ダドン川」は1820年、詩人50歳の時出版された。全34篇のソネットより成り、制作は1806から20年の間である。彼はこの時まで徒歩で、馬の背に揺られて、あるいは馬車で幾度となくダドン川を訪ねている。老境に入った60歳の時、詩人は「その水源近くまで踏破し、その浪漫的な地方の魅力についてそれまでになく生き生きと語った」ことを、ドロシーは記している。⑧　詩人70歳、74歳時のドダン川探訪も記録されており⑨、さらにそれを「私の大好きな川」(my favorite River)と呼び⑩、「ダーウェント川とダドン川の澄明さは特に素晴しい」⑪とも語っているところから判断すると、詩人のこの川への愛着は並々ならぬものであったといえよう。

※

ソネット集「ダドン川」の標題と弟クリストファーに捧げた献辞の間に、ワーズワス自身による次のような説明が挿入されている。

> ダドン川は、ウェストモーランド、カンバーランド、ランカシャーの境界にあるワイノーズ高原にその源を発す。そして約25マイルにわたってカンバーランドとランカシャーの境界線となり、ジ・アイル・オブ・ウオルニーと、ザ・ロードシップ・オブ・ミランの間でアイルランド海に注ぐ。⑫

筆者はグラスミアよりバスで一気に Wynose Pass に運ばれる。約30分程の行程であったか。その峠の自動車がやっとすれ違うことができる程度の道路のすぐ脇に、「有名な州境界石」(the noted Shire-stones) ⑬が立つ(A)。それは高さ２ｍあまり、太さ30×20㎝程の直方体の石の柱である。その片面には 'ＷＦ　1816'、反対の面には 'LANCASHIRE' の文字がレリーフ状に浮き出ている。そこに立つことによって我々は文字通り、上記の三州に同時に位置することができるのである。柱の背後になだらかな小高い丘陵が広がっている。その頂がダドン川の源の一つである。そこまで十分ほど登らなければならない。

> 私は故郷の、ある川の誕生の地を探し求める。
> やー、ようこそ、汝ら山々よ！　汝、朝の光よ！
> 不要な眠りの中で、夢から夢へと苦闘するよりも
> この晴れ渡る高みで、思いきり呼吸する方がよい。
> 清らかに流れよ、わが詩よ。清らかに、力強く、自由に、朗らかに。
> 何故なら、ダドンは、長い間愛してきたダドンは、私のテーマなのだから。
>
> (Ⅰ，９－14)

こゝに三つの出発点が並置されている。一つは言うまでもなく水源であり、他は一日の始まり、「朝」である。朝日は一日中光を発し続ける光源であるから、水源とその原初性において共通する。さらにもう一つの出発点はこのソネット集自体のそれである。即ちダドンの流れは一日の時間の流れであり、その詩集自体の流れでもあることが暗示されている。そして川がその姿を失い海に飲み

込まれる最終局面は一日の終り「夜」においてであり、詩はXXXIII「結末部」で締め括られる。三つの流れが端緒において文字通り融合しているといえる。

川の流れに添って一日の時間経過を詩の中に辿ってみよう。泉が小さな流れから奔流へと成長するにつれて、時は昼へと近づいていく。

ダドンは、その透き通る胸の静かな深みに映し出される像の世界の中で、
凡ての中で最も美しく、柔らかで、生き生きとした
あの白い奔流を最も大事に育くんでいるようだ。
そして人の耳は、その声によって高められる
真昼の賑わしい音ほどに、
眠りを誘う調べを聞いたことがない。

(XIX, 6－12)

この篇は「支流」(Tributary Stream) という題を付されている。それは地図上のJの地点で、山中の Seathwaite Tarn に源を発する Tarn Beck がダドン川に合流する地点である。地図上から判断されるように、川のほゞ中間点に近い。またこの篇が全34篇のほゞ中間に置かれており、三つの流れの対応関係を知ることができる。

そして後半に入ってXXIVで、「真昼が過ぎた。焼けつくように熱い草原に西風が吹くこともなく、雲はその影を投げかけることもない」(1－2)とあり、詩人は木陰で休息に入り、昼の冥想がXXVIIまで続く。

XXVIIIで旅を再開すると、間もなくXXXIで夕暮を迎える。

アルファ教会は、巡礼者の目には、
空の半分も覆う黒雲の
平安な切れ目からその輝ける額を覗かせている
一つの星のように喜ばしい。

(1－4)

こゝでの星は比喩として使用されており、現実のものではないが、夕闇迫り来ることを暗示して効果的である。さらに同篇の「月影の射す山並みの白い頂が微かに輝くのを眺める」(12-4)ことによって、現実の夕刻が確認されよう。

Ulpha Kirk (L)は山中の静かな教会である。建物の東端の祭壇の上にあたる屋根には、十字架と二つの鐘を擁する小塔が立つ。すぐ南側には、上部が三角、四角、あるいは半円形の墓石がいくつも寂然とたゝずんでいる。傍らをダドンの流れが岸辺を洗う。「あの波に洗われる墓地に横たわり、田舎の墓から神聖な思いを引き出すことができたなら」(10－11)という願いは、一人ワーズワスだけのものではあるまい。それを訪れる旅人に等しく湧きおこる希いでもある。

夕はあっという間に暮れる。次の篇で川の流れは夜の闇に紛れ込んでいく。

もはや崖から崖へと烈しく放り出されることもなく、
花に彩られた草原や、生気に満ちた茂みをさすらうこともなく、
また帯状に連なる岩間に停められることもなく、
光り輝きながら深みに向かって行進する。
そこは、どのような力強い川も、力ない眠りに沈み、
自らの本性を忘れてしまうようなところー
今やダドンは川巾を広げ、束縛を解かれ、
堂々と、滑らかで平坦な砂州を黙して滑る！

（XXXII，1－8）

アルファ教会での夕暮、そして「横たわる」イメージは、こゝで「眠り」へと流れてくる。それは容易に夜を連想させるイメージである。前編で山の頂を白く染めていた月光は、今ダドンの流れに届き、水は白く「光り輝きながら」海に注ぐ準備をする。

ダドンはまた人間の一生を物語る流れでもある。「山の揺りかごに育てられた乳飲子」（IV，1）は、泉から湧き出した細い流れの比喩であると同時に、文字通り人間の乳飲子をも暗示する。水量を増し成長する小川と対応するように、次篇では幼児が登場する。

この小屋の血色のいい子供たち、母親の目に注意深く見守られることもなく、
夏の日長を遊びくらす。
汝の楽しい遊び仲間だ。幼児の胸には、終りなき五月のように、
軽やかに、孤独な自然が宿っている。

（V，11－4）

水源から3kmも下がった所Cockley Beck(B)で、道路は二つに分かれる。分岐点でバスから降りる。道を右に取ればローマ軍の駐屯地（Camp on Hard Knot's height，XVII，10．後述）(C)へ出ると指導教官の説明にある。その廃墟は山陰に隠れてこの地点からは見えない。ただ幾重にも連なる山並と、丘の斜面で草を食む牛や羊、そしてダドンの急流が望まれるばかりだ。羊が川に嵌らないようにとの配慮からだろう、川岸に沿って、平たい石を積み重ねた垣や針金の柵が遠くまで延びている。川は既に2、3mの巾となっている。人家も二軒ほど見える。それがワーズワスの時代から在るものかどうか確かめることはできなかったが、それが川沿いに見る初めての人家であった。詩人はこゝに子供たちを配した。母親でなく、自然の手に大事に養われたこの幼児は、太陽と雨の恵みで三年間育てられたルーシーを想起させずにはおかない。

流れが「声高く堂々と行進する奔流」（IX，1－2）になると、それと平行するように「恋に悩む青年（VII，2）や、流れの中の飛び石を手を取り合い戯れながら踏み渡る若い男女が登場する（X）。

マックラケンによると、ダドン川には両岸をつなぐ飛び石は幾つもあるという。Ⅸ，Ⅹの両篇は、詩の文脈からすれば、地図上のDを題材にしたと氏は推定する。しかしその土地の言い伝えでは、Seathwaiteの飛び石(G)を歌ったものということになっている。⑭　筆者は、その中間のE点の飛び石をつぶさに観察できた。

…見よ！　装飾のために選ばれた
帯のようだ。―計算された均衡をもって
石と石が調和を保ち、澄明な水が
束縛されずに、競走を続けられるようにと
空間が用意されている。

（Ⅸ，4－8）

そこにはこの詩行と全く同じ情景があった。6、7mの川巾に10個程の石がほぼ直線状に配置されている。自然によるのでなく、人工的配置であることは明きらかだ。石は直径40～70cm位で、上面は人の手に削られたかと思える程平坦である。長年にわたって人間に踏まれ、水流に磨耗して平らになったのだろうか。この飛び石は現在でも使用されている。飛び石に沿って1本の鋼のロープが張り渡されており、それに掴まりながら向こう岸に渡るという寸法である。今年の夏は雨が異常に多かったせいであろう、幾つかの石は流れに浅く隠れていた。

…水は何と速やかに流れていくことか、
次から次へと引き続いて！ここで、子供は、
水かさを増した川が烈しく荒々しく流れる時、
生まれかけた勇気を試そうとする。またここで、
衰えかかった大人は、秘やかなしかし確実な衰退の侵略を知る。
時は何と速く過ぎ去るものか、
人生の終末は何と近いことか、と思いながら。

（Ⅸ，8－14）

こゝで詩人は、速い水流に速い時間経過を重ね合わせている。急流は速やかに過ぎ去る時間の明確な形象化・空間化である。初老期にさしかかった詩人は、自分自身に確実に忍び寄る老いを自覚していたことは明白である。

飛び石を渡る若い二人の恋は、もはや詩人には無縁のものとなってしまった。しかしその恋は「いたずら好きの愛の女神」（Ⅹ，13）にそそのかされているものだから、永続するものではない。人事はすべて一過性のものなのだ。この恋の結末を知らせるかのように、XXⅡでは失恋の女性が登場する。遠い昔、一人の女性が、水晶のようなダイアナの姿見にも劣らぬ澄明なこの沐浴場にやって来る。人目につかぬその深みに桜草が一つ映っている。彼女はそれをわが物にしようと入水し、溺死

してしまう。険しい岩肌には今なお毎年桜草が咲くという、ギリシャ神話を彷彿させるような「伝説」である。

現在その場はLong Dub (K)と呼ばれ、険しい岩場が両側に迫り、その間に狭い、あるいは広い沐浴場を形成している。一人岩場を足元に注意しながら川面近くまで降りてみると、「人目につかぬ」(2)水辺で三人の男性が沐浴していた。一人は日本人である。現在でもここは格好の浴場であるらしい。間もなく三人はバイクの騒音を響かせて姿を消した。束の間の「伝説」の現代版であった。

ソネットは流れ下ってXXVIIでは、かつて陣容を整え、要塞を固めた武人たちが皆「時の容赦せぬ手」(10)に滅ぼされ、彼岸の世界に眠っているさまが歌われる。XXIXでも王侯貴族、勇者たちが見捨てられ、忘れられて、空しく大地に横たわっている様が描かれる。流れが海に近づくにつれ人間の死が導入されたのだ。死は、「波に洗われる墓地に横になって」休息している詩人にも間もなくやってくることは疑いない。海に注ぐことが「無力の眠りの中に沈み、自己の本性を忘れる」ことであるならば、それは死の世界への移入とも重なり合おう。ワーズワスは「野望を持たぬ、凡ゆる機能が衰える巨大な容器」(XXXIII, 7－8)である海(死)へ注ぐべく、「心の平安、精神と魂の平安の中に、永遠と融合しあう準備をする」(XXXIII, 13－4)。

これまで見てきたように、水源から海へ流れ込む一筋の流れは、人間の誕生から死までの時間の流れでもある。この人間の一生をコンパクトにまとめたと想定されるソネットがXVIII「シーズウエイト礼拝堂」(I)である。シーズウエイトは前述したように川のほぼ中間点にあり、それに照応するかの如く、その篇は全篇の丁度中間に置かれている。ここには、「チョーサーの詩が描いているような、ハーバートの天賦の技が引き出したような、優しいゴールドスミスが不滅の賞賛を献げたような一人の牧師」(12－14)が言及される。彼についてはソネットでは何も触れられないが、ワーズワス自身が注で約六千語に及ぶ長い解説を加えている。この牧師は聖ロバート・ウオーカー(Reverend Robert Walker)で、地元のUnder Crag (H)に1709年生まれ、第67代目の教区牧師として66年間その地に勤め、そこで93歳の生涯を終えた。彼は「ワンダフル・ウオーカー」という愛称を与えられ、地域の人々に尊敬された。詩人は、夫として、父として、牧師としての様々な彼の美徳を取り上げ、深い愛敬の念を表白している。「ソネット集全体が『ワンダフル』・ウオーカーへの記念碑であると言ってもよかろう」⑮という見方はあながち的外れとも思われない。「乳飲子」から「永遠と融合しあう」死者までの人間の一生を辿る流れは、結局この篇のウオーカー牧師の一生に収斂されているとも言えよう。

教会の入口のすぐ左手に上部が平らになった大きな石が置かれている。そこには小さな日時計と金属板が据付けられており、その板には次のような意味の言葉が刻まれている。「この石は18世紀半ば頃、ゲイトスケル農場で、ワンダフル・ウオーカーという名称で尊敬されていたシーズウエイト教区牧師、聖ロバート・ウオーカーによって、羊の毛を刈る時の椅子として使用された。」

門を通って入口に向かう小道の右手にウオーカー牧師の墓がある。水平に据えられた墓石の表面の文字は大部風化して読み難いが、彼と、妻と、娘のメモリアルが刻みつけられている。

ダドンの流れは、有史以前から近代文明までの人類の歴史の流れでもある。詩人が最初に「晴れ渡った高み」に位置していたことは先に述べたが、その「高み」は空間におけるだけでなく、時の「高み」も暗示している。それは太古から近代までの歴史的過程を、川の流れと平行して辿ろうとする詩人の意図を窺わせるものである。

あの巨大な森は、かつては野牛を視界から隠し、
そこでは大鹿が、暗き緑に覆われた細い小道を通って、
草木の絡まる寝床へ、のっそり近づくこともあった。
数千前も以前には、熱心な狩人のひゅーと風を切る矢が、
静まりかえった空気を突き破ることもあった。

（Ⅱ，10－14）

水源はうっそりとした森の中にあったのだろうか。太陽の届かぬ、小暗き原生林の奥に、小さな泉が人知れず清らかな水を湧き出している構図が水源のイメージに相応しい。しかし現実のダドン川の源は森の中ではない。幾つもの泉を胚胎する丘陵は、一面せいぜい30㎝程度の草に覆われているだけで、木は一本もない。太陽と大気にむき出しの、何とも神秘性を伴なわぬ小高い山の頂きである。樹木がないから眺望は非常によい。遠くまで連なる青い山並と、谷間を細く幾筋にも分かれて、「きらめく蛇のように」（Ⅳ，5）「い草の間を曲りくねって縫う」(7)様がはっきり見てとれる。その光景は、「じっと見つめる者には、非現実的のもの」(6)に見える。

湖水地方の山頂はいずれもこうした風景であることから推測すると、ダドンの水源の状況はワーズワスの時代も現在と同じようなものだったと思われる。それでは何故彼は現実の風景のままに描かなかったのか。

詩人は、この詩集の出発点で、古代ラテンやペルシャ、アルプスの川でなく、故郷の川の泉を求めるのだと歌い出している（Ⅰ，1－9）。「ダドンが私のテーマだ」⒁と明確に述べている。しかしそれは彼の真意と矛盾する。何故なら、彼自身注で、「それは小さなダドン川についてであるが、ガンジス川やナイル川も含んだ他の多くの川についてでもある。―多くの泉はその発端（head）であるという名誉を主張してもよいからだ」⑯と述べているからである。即ち彼はダドン川によって、それを含めた他の川も描くことを当初より予定していたのだ。ダドンは総体としての川の代表にすぎない。するとダドン川流域には関係のない話題も語られることになろう。事実、これから見ていくように幾つか言及されることになるが、すると厳密な意味では、「ダドン川」は地誌詩とは言えないという議論も成立しよう。しかし詩人の想像力によって流れと流域が変容を受けるからこそ、地誌学的ガイドブックでなく文学作品としての価値が生まれてくるのである。

ある一族のもので、この暗い谷間を最初に歩き、疾走し、そして
この澄みきった流れで、喉の渇きを癒したその人間は
どのような様子をしていただろうか？
どのような希望が彼と共にやって来たのか？
どのような企てが彼の通う道に添って展開されたか？
どのような夢が彼の無防備な寝床を包んだか？
その侵入者は残酷な待遇を受けただろうか、
生者をやせ衰えさせ、死者の眠りを
かき乱す呪うべき儀式を？
どんな声も答えない—大気も大地も黙したままだ。

（Ⅷ，１－８）

詩人はこの地に最初に足を踏み入れた有史以前の人類に思いを駆せる。「この暗い谷間」（this dark dell）の現実地点はどこであるか定かでない。「恐らく Hardknott ghyll （Cの近く）か、Cockley Beck (B)辺りではないか」⑰と言われている。照応地点の探求はたいして意味がない。注目すべきことは、川と詩と人類の歴史の流れの対応である。「青い小川」（blue Streamlet，10）は、流れ出したばかりのダドン川であり、人類の歴史の草創期を示唆することである。

XⅡで、詩人は「深くうがたれた川底」(2)にナイアガラの滝、アルプスの山道、ギリシャの水の精ナイアデスを見る。次の篇ではアメリカ大陸の五大湖の一つオンタリオ湖が想想される。詩人の想像力は眼前のダドン川に限定されず、世界のあちこちの空間を翔けめぐる。ダドンの流れはその流域の人間の歴史にとどまらず全人類の歴史の流れでもあるからだ。

地図上のＦ点にXVに歌われている「岩の深い凹み」(1)がある。

それは人間によって彫られたのだろうか？—
怠惰で疲労困憊の奴隷によって！　それとも火によって、
急速に粗野な形に鋳造され、激しい突風に、
中央部の洞窟から荒々しくもぎ取られたものか？
それとも最も高い丘陵一帯を大洪水が通り過ぎた時、
波の激流に形づくられたものだろうか？

（９－14）

奴隷や大洪水に誘発された詩人の空想は、次の篇XVI「アメリカの伝説」でオノロコ川流域の岩の絶壁に彫りつけられた様々な彫刻群へと移っていく。

XⅦでは古代デイン人、ローマ軍、ハードノット高地の要塞(C)、ドルイド教の環状列石などが取り上げられる。次の篇では、古代宗教にとって代ったキリスト教がシーズウエイト礼拝堂を契機に

導入される。そしてこゝで前に見たように、中世の福音伝導者からチョーサー（14C.）、ハーバート（17C.）、ゴールドスミス（18C.）三詩人が年代を追って歌われる。

川が流れ下ってアルファの教会(L)近くまで来ると、近世の絶対王制時代を暗示するような詩行が綴られる。

しかし、無視され、打ち捨てられて、
空しい大地に横たわる王侯貴族や勇士たち、
渡る風は思い出の賛辞を呈する。
急流は略奪された権力に侮辱を示しながら
彼らへの賛歌を高らかに謳う。

（XXIX，9－12）

いよいよ河口に達すると、ダドン川はテムズ河に比較される。

（ダドン川は）堂々としたその物腰において、
通商貿易や勝利の戦を積み出し、ケントの丘陵の下に
胸を広げる最高の河テムズに似ている。

（XXXII，12－4）

しかしここには、微風に合わせて轟く大砲の音はない。
波の上に、傲慢な三角旗が深紅色の輝きを投げかけることもない。
ここに立てられるマストは低く、
帆は控え目に広げられている。

（XXXIII，1－4）

一貫して流れて来たダドン川が「永遠と融合する」そのクライマックス直前に、読者の関心がテムズ河に向けられるのは詩的緊張を殺ぐものである。セリンコートも「『勝利の戦』や『大砲』は不自然な言及であり、必ずしも適切な思いつきとはいえない」⑱と述べ、またチョウハンも「川が海へ注ぐ広大な砂州から読者の心をそらしてしまう」⑲と不満を表明している。

もともとXXXIIのオクタブとXXXIIIのセステットは一つのソネットを成していた。⑳　しかし分割され、その間にこのテムズ川との比較部が挿入されたのである。そこにはワーズワスなりの意図があったと思われる。IIの冒頭部「雲より生まれた子よ、卑しい産業の汚濁から遠く離れて汝の運命は投げられる」（1－2）から推測されるように、太古から近代文明までの流れは無垢から汚濁への流れであることが当初から予定されていたのだ。近代文明の象徴として、商業活動や戦争と結びつくテムズ河が導入されたのである。「傲慢な三角旗」に近代文明の軽薄と虚飾を見ることができようし、「轟く大砲の音」に対する彼の嫌悪感は既に『序曲』で言及されているところである。

…そこで私は

毎夕、静かな海辺を散策していると、
きまってある警報の響きを聞いた—
日没の砲声の響きを。太陽が大自然の
静謐の中に沈み込む時、
その響きはやって来た—不吉な鎮魂歌—
その響きに、わが心は陰うつに沈み、来たるべき悲哀に深く思いを沈め、
人類の不幸を悲しみ、心は痛みにうずくのであった。

(10巻、298－305) ㉑

こうして太古の世から流れ出した一筋の川は近代に辿りつく。その人類史はきっちりと年代を追って記述されているわけではないし、川の流れと歴史的時間の対応関係は必ずしも明確なものではないが、両者を重ね合わせようとするワーズワスの意図は汲み取ることができよう。

筆者はダドンの流れに別れを告げるべく、Nの地点に立った。小雨の夕暮れの中に灰色の砂州が右手に長く伸びているのが認められる。その中を一筋白く輝きながらダドンは海へ急ぐ。思ったより細い流れである。ここは砂州が始まったばかりだからだろう。テムズ河のようにゆったりと堂々と流れる様を見るには、ミランを通過してウオルニー島の近くで海と融合合体する地点まで足を運ばなければならない。

私は、私の同伴者であり指導者でもあるおまえが逝ってしまったと思っていた。
何と愚かな哀れみよ。
何故なら、ダドンの流れよ、私が振り返ってみると、
過去に何があり、現在何が存在し、また未来に何が持続するか
私にはわかるからだ。静かに川は流れゆき、永遠に流れ続けるだろう。
その姿は失なわれることはなく、その機能も消えることはない。

(XXXIV, 1－6)

ダドンの流れは、一日の、人間の一生の、人類の全歴史の時間経過であることを検討してきた。この三つの時間の流れが重なり合うとすれば、人の一生は一日の如く、全く瞬間的で刹那的な存在である。そして同時に人類の全歴史の如く、未来にわたって生命を持ちえる持続的存在をともなろう。ダドンの水源は「雲より生まれた子よ！」(II, 1) と、河口のダドンは「雲から生まれた流れよ！」(XXXIII, 9) と呼びかけられ、流れの両端で流れの親である天空が意識されている。海に注いだ水は天空を通って再びダドンの源に回帰する。そして永遠の循環をくり返す。

初老期にさしかかったワーズワスが「ダドン川」で表白した詩想は、永遠なる生命の希求そのものではなかったか。㉒

注

① *Journals of Dorothy Wordsworth*, ed. E. de Selincourt (London : Macmillan, 1941), Vol. Ⅰ, p.234.

② *Ibid.*, p.14.

③ Mary Moorman, *William Wordsworth, A Biography, The Early Years* (Oxford : Clarendon Press, 1957), p.325.

④ *The Poetical Works of William Wordsworth*, ed. E. de Selincourt and Helen Darbishire (Oxford : Clarendon Press, 1946), Vol. Ⅲ, p.489.

⑤ *Ibid.*, p.504.

⑥ David McCracken, *Wordsworth and the Lake District, A Guide to the Poems and Their Places* (Oxford : Oxford Univ. Press, 1984), 280ページの地図を借用した。ただし、地点に付した記号A、B、C、…は適当に変えた。

⑦ *The Poetical Works*, Vol. Ⅲ, pp.504 ～ 505.

⑧ *Wordsworth and the Lake District*, p.176.

⑨ *Ibid.*, p.178.

⑩ *Ibid.*, p.176.

⑪ William Wordsworth, *Guide to the Lakes*, ed. E. de Selincourt (Oxford : Oxford Univ. Press, 1977), p.42.

⑫ *The Poetical Works*, Vol. Ⅲ, p.244　なお、以下の日本語訳にはこのテキストを使用した。

⑬ *Ibid.*, p.504.

⑭ *Wordsworth and the Lake District*, p.279.

⑮ John Dawson and David Briggs, *Wordsworth's Duddon Revisited* (Cumbria : Cicerone Press, 1988), p.10.

⑯ *The Poetical Works*, Vol. Ⅲ, p.504.

⑰ *The Poetical Works of William Wordsworth*, ed. William Knight (London : Macmillan, 1896), Vol. Ⅵ, pp.237 ～ 238.

⑱ *The Poetical Works*, ed. E. de Selincourt, Vol. Ⅲ, p.524

⑲ P.P.S Chauhan, *Sonnets of Wordsworth* (New Delhi : S. Chand & Company, n. d.), p.44.

⑳ *The Poetical Works*, ed. E. de Selincourt, Vol. Ⅲ. p.260.

㉑ William Wordsworth, *The Prelude 1799, 1805, 1850*, ed. Jonathan Wordsworth, M. H. Abrams, and Stephen Gill (London : Norton & Company, 1979), p.374. 1815年版を採用。

㉒ ワーズワスにおける水の流れと時間意識の関係については、拙論「ワーズワスにおける水と時

間の流れ――後期の詩を中心にして」(『ロマン派文学のすがた』(仙台イギリス・ロマン派研究会、東北大学生協、1993年) 所収) 参照。